

---

# アニメ転生『ギルティクラウン』

雨月 夜葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アニメ転生『ギルティクラウン』

### 【コード】

N9946Y

### 【作者名】

雨月 夜葉

### 【あらすじ】

アニメのギルティクラウンの世界に転生した主人公が頑張ってる話

チート仕様です。

## 転生の前(前書き)

テスト期間だけど関係ねえギルクラ初投稿です。

## 転生の前

僕は、ギルティクラウンを見て思った。

何が起きても動じない心が欲しかった。

だが僕は、あまりにも平凡である。事故から家族を守れなかった人間……

何故、自分は、動かなかっただらうか？

一つ下の妹は、助かった僕に「助けて」と言った。僕は、ただ音を拾わぬように耳を手で覆った。

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！！！！

誰でもいい誰でもいいから僕をたすけてよ！

ただふさぎ込む。

守れない思っただけじゃ守れない

夢に出てくるんだ。妹が僕に『嘘つき』と血を流し語る姿を見て僕は、再び耳を閉じる。

その男の名前は、『ユーリ』ただそれだけ…家族は、いないいや、

殺してしまった。

死のう…死ねば楽になるはずだ。

自分で自分の首をベルトで縛った。

「グッ…エ」

変な奇声が出て気付くとベッドで泣いていた。死ぬ勇気が無い。いや、死にたくない。

PPPPPPPP!

メールがケータイに入った。普段見ないケータイをたまたま開くと

『ワシに会って見よ。世界が変わるはずだ。君には、新しい器が必要だね。』

「ハッ！此処は、いつたい？」

「気付いたかね。ワシは、君達で言う神様じゃ」

「……………」

神様…信じられない普通ならだがこの空間自体ありえない。これは、充分神様と言う証明になっている。

「神様がこんな人殺しになんのようですか？」

「君の家族に頼まれてな…君を救ってくれと」

思わずポロと涙が溢れた。

「ははっ…自分の心配しろよな。本当にお人よしなんだからさあ…」

「君は、転生をするんだよ。別世界にね。君の世界で『ギルティクラウン』と呼ばれる世界にね」

「ギルティクラウン！！まじか！」

あの友達を武器に戦う青年と歌う少女が戦う世界か？

「うむ。そうじゃ」

「でも俺絶対死ぬよな。あんな戦闘してたらいつの間にか死んでそう」

「大丈夫じゃ願いを三つ叶えよう」

三本の指を立てた神様がニッコリ笑った。神様が楽しそうだ。

「え〜っと

運動神経MAX

射撃能力MAX

世界の知識

くらいかな」

「わかったのじゃ」

「ありがとう」

神様は、微笑んだ。

「君の両親と妹さんは、いい人じゃったのう。君を愛していた。」

ユーリは、ニッコリ笑って

「最高の家族だったよ。死んでも迷惑かけちゃったな。」

その顔は、かつこよさで言えばかなりのイケメンだった。これが本当のユーリの笑顔だった。

「俺ってあつちの世界じゃどうなってんの？」

「あるマンションの一室にいるはずじゃそのうち君には、やはり困

難が訪れるはずじゃちなみに両親は、いない」

「うん……知ってる。あの家族以外に家族作る気も無い……」

「すまん」

ユーリは、首を横に降って否定した。

「いや、むしろ礼を言わないといけないんだ。」

「そろそろ始めるかのう……」

「ああ」

「最後にサービスじゃ。欲しい銃は、在るかのう？」

原作知識と世界の知識があるはずじゃ無かったっけ？

「メイドインゴッドって奴じゃ。」

「なるほど……口径がかなり大きく連射できる拳銃でお願いします。」

「ほい」

ガシャンと音を立てて地面に拳銃が落ちた。

シルバーのメッキに二つの翼が掘られたマークの銃で銃口は、かなり大きく自動拳銃だ。手にしっくりと来る。

「名前は、『天誅』かな？」

「安易じゃな」

「いいじゃないですか!」

「ちなみに銃の威力は、一発でビルが吹き飛ぶ。」

「ぶっ!」

「まあ気にせず転生の儀式に入る。」

ギギギギツ!バン!

古い扉を開けたような鈍い音が響き

ユーリの転生は、終了した。

転生の前（後書き）

いのり 声良い

スカウト(前書き)

ねみい〜い

## スカウト

僕は、ギルティクラウンを見て思った。

何が起きてても動じない心が欲しかった。

だが僕は、あまりにも平凡である。事故から家族を守れなかった人間……

何故、自分は、動かなかっただらうか？

一つ下の妹は、助かった僕に「助けて」と言った。僕は、ただ音を拾わぬように耳を手で覆った。

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！！！！

誰でもいい誰でもいいから僕をたすけてよ！

ただふさぎ込む。

守れない思いだけじゃ守れない

夢に出てくるんだ。妹が僕に『嘘つき』と血を流し語る姿を見て僕は、再び耳を閉じる。

その男の名前は、『ユーリ』ただそれだけ…家族は、いないいや、

殺してしまった。

死のう…死ねば楽になるはずだ。

自分で自分の首をベルトで縛った。

「グッ…エ」

変な奇声が出て気付くとベッドで泣いていた。死ぬ勇気が無い。いや、死にたくない。

PPPPPPPP!

メールがケータイに入った。普段見ないケータイをたまたま開くと

『ワシに会って見よ。世界が変わるはずだ。君には、新しい器が必要だね。』

「ハッ！此処は、いつたい？」

「気付いたかね。ワシは、君達で言う神様じゃ」

「……………」

神様…信じられない普通ならだがこの空間自体ありえない。これは、充分神様と言う証明になっている。

「神様がこんな人殺しになんのようですか？」

「君の家族に頼まれてな…君を救ってくれと」

思わずポロと涙が溢れた。

「ははっ…自分の心配しろよな。本当にお人よしなんだからさあ…」

「君は、転生をするんだよ。別世界にね。君の世界で『ギルティクラウン』と呼ばれる世界にね」

「ギルティクラウン！！まじか！」

あの友達を武器に戦う青年と歌う少女が戦う世界か？

「うむ。そうじゃ」

「でも俺絶対死ぬよな。あんな戦闘してたらいつの間にか死んでそう」

「大丈夫じゃ願いを三つ叶えよう」

三本の指を立てた神様がニッコリ笑った。神様が楽しそうだ。

「え〜っと

運動神経MAX

射撃能力MAX

世界の知識

くらいかな」

「わかったのじゃ」

「ありがとう」

神様は、微笑んだ。

「君の両親と妹さんは、いい人じゃったのう。君を愛していた。」

ユーリは、ニッコリ笑って

「最高の家族だったよ。死んでも迷惑かけちゃったな。」

その顔は、かつこよさで言えばかなりのイケメンだった。これが本当のユーリの笑顔だった。

「俺ってあつちの世界じゃどうなってんの？」

「あるマンションの一室にいるはずじゃそのうち君には、やはり困

難が訪れるはずじゃちなみに両親は、いない」

「うん……知ってる。あの家族以外に家族作る気も無い……」

「すまん」

ユーリは、首を横に降って否定した。

「いや、むしろ礼を言わないといけないんだ。」

「そろそろ始めるかのう……」

「ああ」

「最後にサービスじゃ。欲しい銃は、在るかのう？」

原作知識と世界の知識があるはずじゃ無かったっけ？

「メイドインゴッドって奴じゃ。」

「なるほど……口径がかなり大きく連射できる拳銃でお願いします。」

「ほい」

ガシャンと音を立てて地面に拳銃が落ちた。

シルバーのメッキに二つの翼が掘られたマークの銃で銃口は、かなり大きく自動拳銃だ。手にしっくりと来る。

「名前は、『天誅』かな？」

「安易じゃな」

「いいじゃないですか!」

「ちなみに銃の威力は、一発でビルが吹き飛ぶ。」

「ぶっ!」

「まあ気にせず転生の儀式に入る。」

ギギギギツ!バン!

古い扉を開けたような鈍い音が響き

ユーリの転生は、終了した。

スカウト(後書き)

ボタンツキユ)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9946y/>

---

アニメ転生『ギルティクラウン』

2011年11月30日00時51分発行